

I 主題設定の理由

本稿の研究主題は、「主体的にコミュニケーションを図ることができる児童の育成」である。本校は、平成29年度より土岐市の研究推進校としての指定を受け、外国語活動の教科化に向けての取り組みを進めてきた。平成32年度の新学習指導要領の全面実施を経て、高学年では外国語が教科化され、中学年でも外国語活動が導入されることになっている。これを見据え、外国語活動・外国語の授業の在り方についての研究を進めることは、移行期の今求められていることである。

本校のこれまでの外国語活動では、担任が外国語の授業を行うことは抵抗が大きくT1としての役割を十分に果たすことができずにいた。その結果として「ALT任せ」の状況が続いてきた。また、児童も見通しをもって主体的に学習に取り組むことに弱さがあった。まずは、担任がT1として教壇に立って授業を行い、その結果として児童が主体的にコミュニケーションを図ることを目指して取り組んだ。

II 願う児童の姿

児童の実態から、願う児童の姿を次のように考えた。

- 音声やリズムに慣れ親しみながら聞いたり、既習の表現やジェスチャーを使って話したりできる児童
- 相手や場面に応じて臨機応変に考えながらコミュニケーションを図ることができる児童
- 自他のよさや共に学び合うよさを実感してコミュニケーションを図る児童

III 研究仮説

児童の実態を踏まえ、願う児童の姿に迫るために、次のような研究仮説を設定した。

外国語（英語）を聞く・話す必然性のある場面が設定された学習活動で、考えや気持ちなどを伝え合うことができれば、主体的にコミュニケーションを図る児童を育成できる。

IV 研究内容

研究主題の具現に向けて、研究内容を3つに整理し、全校研究会や校内研修会を進めてきた。研究内容は以下の3つである。

【研究内容1】校内研究体制の整備

1. 教師の英語力向上のための取組
2. 指導力向上のための取組

【研究内容2】指導計画の理解と工夫

1. コミュニケーション能力の素地・基礎を養う
単元構成の理解
第1時 気付き
第2・3時 慣れ親しみ
第4時 主体的なコミュニケーション
2. 聞く・話す必然性のある終末の活動
 - ・聞く・話す必然性のある場面設定
 - ・考えや気持ちを伝え合うことを促す活動

【研究内容3】指導過程の工夫

1. 見通しをもって主体的に取り組める学習活動の設定
Hello time / Warm up time / Today's goal / Play time / Comment time / Goodbye time
2. 主体的に取り組むことができる評価の在り方
 - (1) 児童自らが英語学習に目標をもち、その過程を見直し、新たな学びにつなげられる自己評価シートの作成・活用
 - (2) 児童が仲間のよさを知り、困り感を共有し、活動後半への足場をつくる中間交流 (Half time)

V 研究実践

【研究内容1】校内研究体制の整備

校内で外国語活動の実践を進めていくにあたり、まず大切にしていることは、全校研究体制を整え、全職

員で研究を推進していくことである。担任教師がT1として授業を行う意識をつくるために、授業づくりを中学年・高学年の教員に任せず、全職員でサポートしたいとの思いから、研究内容1に「校内研究体制の整備」を位置付けた。具体的に実施した取組は大きく下記の2つである。

(1) 教師の英語力向上のための取組

英語の授業を行っていくにあたり、教師の英語発話量を増やすことが必要な反面、授業者には不安があった。そこで、文部科学省「小学校外国語・外国語活動研修ガイドブック」から、使用頻度が多いと思われるものを抜粋し「使ってみよう！クラスルームイングリッシュ」(別添資料)としてまとめた。使用する場面ごとに英語表現をまとめ、教師が授業の際に活用している。また、職員打ち合わせの冒頭3分間で、これを活用した3分間英語研修を毎週行っている。この取り組みを通して、担任が自信をもって授業を行うことができるようになってきた。

(2) 指導力向上のための取組

教師の指導力向上のために、大きく二つの取組を行ってきた。

一つ目は、全職員で研究推進を進めるために、低学年や7・8年生の教員も含めた「学年部会」を組織した

ことである。4月には、1学期の授業について教材を確認しながら見通しをもち、7月には1学期の成果と課題や2学期以降の取組について



学年部会の様子

で話し合った。研究授業後の全校研究会でも学年部会のグループ討議を採用し、皆が意見を出し合うようにした。一人一人が挙手で発言する方式ではなくグループで話し合うことでより議論が深まった。このような取組の中で、授業者のみでは得ることができない新たなアイデアや指導法が生まれ、授業改善を進めることができた。

二つ目は、全研オリエンテーションの工夫・改善である。職員が授業について具体的なイメージをもつことができるよう、実際に教室を用いた模擬授業形式で

行った。単なる紙面での理解にとどまらず、実際の教材を用いて子供の立場になり授業を考えることで、授業者、研推メンバーだけでなく、教員一人一人がより具体的に授業のイメージをもつことができた。その結果、全研オリが一つの研修会となり、指導力向上の時間となった。



全研オリエンテーションの様子

【研究内容2】指導計画の理解と工夫

1. コミュニケーション能力の素地・基礎を養う単元構成の理解

移行期間の指導計画については、文部科学省、岐阜県教育委員会から第3・4年生15時間分、第5・6年生50時間分のものが示されている。この指導計画をもとに、単位時間ごとの活動を位置付けた年間指導計画を作成した(別添資料)。作成した指導計画を指導者が理解し、着実に実施していくことが重要であると考えている。

このことに加え、単元構成の段階を

- | |
|----------------|
| ①気付き |
| ②慣れ親しみ |
| ③主体的なコミュニケーション |

の3つととらえ、それぞれの段階での授業展開を研究してきた。

①「気付き」は、児童が新たな英語表現に出会う段階である。児童がより興味をもって学習できるように、身近な事物を用いたり、デジタル教材を活用したりした。**第1回全校研 3年生 Let's Try! 1 Unit4 I like blue.** の実践では、色の言い方を導入する際に、初めから色の言い方を教えるのではなく、デジタル教材を活用して世界の虹と日本の虹を比べる活動を通して児童が自然と色に興味を抱くように工夫をした。児童は「自分だけの虹」を作る活動を行いながら、世界の国と日本の虹が違うことに気付くことができた。

②「慣れ親しみ」は、児童が言語活動を通して表現の言い方に慣れていく段階である。活動を変えながら児

童が繰り返し英語を発話する仕組みづくりを大切にしました。その際に、文部科学省の指導計画に例示されている活動を行ったり、高学年では Small talk を取り入れたりしながら、発話する中で表現に慣れ親しんでいくように工夫した。

これは単元を通して大切にしたいことであるが、外国語活動の授業において大切にしていることは、表現に慣れ親しんでから活動をするのではなく、活動をする中で慣れ親しんでいくことである。つまり、「質より量」ということであり、始めから質の高い英語を求めるのではなく、「量」をこなす中で「質」が高まるようにした。表現の使い方や意味を明示的に教えることはせず、言語活動を通して児童が表現の意味に気づき、だんだん話すことができるようになることを大切にしました。

③「主体的なコミュニケーション」は、単元を通して慣れ親しんできた表現を駆使して児童が互いにコミュニケーションをとる場面である。この場面で大切にしたいことは、「児童が思考する言語活動」を行うことである。**第2回全校研 6年生 We Can! 2 Unit3 He is famous. She is great.** の実践では、単元の終末に「クイズ大会」を設定した。クイズ出題者がヒントを出し、回答者は出題者に対して質問をしながら答える、という活動である。この活動では、「回答者が出題者に対して質問をする」ということを重点として、相手に質問をするときの表現を児童に考えさせるようにした。活動の手順を児童に知らせた後、まず児童に活動をさせ、中間交流で困り感を共有する中で「どのように質問をするとよいか」を児童に考えさせるようにした。「言い方がわからない」などの困り感に対し、教師やALTが答えを与えるのではなく、「どうやって言ったらいい？」と児童に問い返し、児童が既習表現を想起できるように支援をした。

2. 聞く・話す必然性のある終末の活動

(活動の細案は別添指導案を参照)

第1回全校研 3年生

「Let's Try! 1 Unit4 I like blue.」 の実践

この実践では、単元の終末に「仲間に好きな色を聞きながら、ハッピーレインボーを完成させる」という活動を設定した。言語活動を行った結果としてハッピーレインボーが完成するというような流れにしたこ

とで、児童がコミュニケーションを行う必然性が生まれ目的意識をもって活動をすることができた。

第2回全校研 6年生

「We Can! 2 Unit3 He is famous. She is great.」 の実践

この実践では、単元の終末に「クイズ大会」を設定した。出題者がヒント文を言うということが発話をする必然性となり、目的意識をもつことができた。そして、この実践では、単元を通して大切にすることを明確にして授業を展開してきた。本単元ではSVOの語順に気付くことを大切に、単元を通して位置付けた。クイズ大会でSVOを意識したヒント文を相手に伝えるという目的をもって児童は「コミュニケーション」の活動に取り組むことができた。

【研究内容3】指導過程の工夫

1. 見通しをもって主体的に取り組める学習活動の設定

外国語活動の授業では、以下のような流れで授業を実践している。また、黒板にも掲示物を示し、授業の流れを示している。



- ① Hello time
- ② Warm up time
- ③ Today's goal
- ④ Play time
- ⑤ Comment time
- ⑥ goodbye time.

授業の流れを黒板に位置付けることは、外国語活動の授業のみならず、ユニバーサルデザインの観点からも重要なことである。授業の大まかな流れを上記の通りに統一することで、児童は活動の流れを理解することができ、自分の活動を視覚的に理解することができた。毎回の授業の流れが同じであることを利用して、English Leaders が係として活躍している学級もある。Hello time のあいさつのやり取りや、活動の切り替わりの場面などでリーダーを活用し、児童が主体的に学習に取り組むことが徐々にできるようになってきた。

授業の流れを同じにすることは、教師にとっても有効な手立てとなった。特に英語の専科ではない教員が授業をするにあたっては、毎回の授業の流れが同じであることから授業展開をイメージしやすく、授業の仕方が分からないということはなくなってきた。

2. 主体的に取り組むことができる学習活動の評価の在り方

(1) 児童自らが英語学習に目標をもち、その過程を見直し、新たな学びにつなげられる自己評価シートの作成・活用

児童が活動中の自分や仲間の様子について記録する手立てを講じることで、評価に生かすことができるのは明白である。このことから、評価カードを活用した評価活動を設定している (Comment time)。また、評価カードの形式を工夫し、3つの観点に沿った評価ができるようにしている。それに加え、単位時間ごとに振り返りを積み上げていくような形式とし、1枚の評価カードを単元を通して使用することで、単元を通じた児童の変容を明らかにできるように工夫した。

(2) 児童が仲間のよさを知り、困り感を共有し、活動後半への足場を作る中間交流 (Half time)

言語活動を前半と後半に分け、その間に中間交流 (Half time) を行っている。中間交流を設ける目的は以下の3つである。

- ①本時の課題 (Today's goal) の達成状況を見届ける。
- ②活動前半で見届けた児童の良さを共有する。
- ③活動の中での困り感を共有する。

中間交流を位置づけることが目的ではない。中間交流を通して何を高めたいのか、この意図を教師がはっきりさせることが重要であると考えている。

〈第1回全校研 3年生 Let's Try! 1 Unit4 I like blue.〉では、②に重点を置いて実践を行った。活動を行う前に、本時の課題に加えてコミュニケーションマナーとして Eye contact と Clear voice を示した。中間交流で本時大切にしたいコミュニケーションマナーに照らして良かった児童を抽出し、モデルとして児童に示した。そこで、どんな所がよかったかを児童に問い、良さを広めた。こうすることで、活動後半の活動の質が高まった。

〈第2回全校研 6年生 We Can! 2 Unit3 He is famous. She is great.〉では、③に重点を置いた。質問するときの表現について中間交流で共有する中で、児童が既習表現を想起することができるようにした。困り感を共有するためには、まず児童に困り感をもたせることが不可欠である。そのために、「まずやら

せてみる」を合言葉にし、活動をする中で慣れ親しんでいくように心がけた。このような取組を通して、はじめは日本語で質問をしていた児童も、活動の後半では英語で質問をすることができ、中間交流を経たレベルアップを図ることができた。

VI 成果と課題

【研究内容1】校内研究体制の整備

- 学年部会を組織し、授業検討や研修会を進めることで、授業者をチームでバックアップできた。
- 全研オリエンテーションなどの研修会を通して担任が授業の仕方をイメージすることができ、担任がT1として行う外国語活動の実践ができた。
- 主体的な授業 (コミュニケーション) のための学習環境を研究していきたい。(掲示物 学級経営等)

【研究内容2】指導計画の理解と工夫

- 県教委からの指導計画をもとに、一つ一つ着実に授業実践を進めてきた。毎週の積み重ねを通して授業実践の力を高めることができた。
- 単元構成を理解することで、それぞれの役割の時間での授業の仕方を考えることができた。特に、「活用しながら慣れ親しむ」ということを大切にすることで、児童が表現の意味を考えたり、既習の表現を駆使してコミュニケーションをしたりすることができた。
- 高学年での読み書きについて考えていく。各学年のワークシートの活用の仕方を考察したい。

【研究内容3】指導過程の工夫

- 授業の流れを可視化し板書に位置付けることで、児童のみならず担任も見通しをもって授業を進めることができた。
- 評価カードを活用し、児童の毎時間の変容を記録することができた。3つの観点をもとに評価することができた。
- 中間交流で大切にしたいことともに、良さの広め方を研究したい。(児童のモデル・ビデオの活用など)